

第5回「ツール・ド・北海道安全対策検討会」議事要旨

(開催要領)

- 1 日 時 令和6年6月12日(水) 13:30~15:30
- 2 場 所 Web 会議
- 3 出席委員 座長 武藤俊雄(北海道大学 公共政策大学院 准教授)
委員 甲谷 恵(公益社団法人 北海道交通安全推進委員会筆頭副会長)
委員 萩原 亨(北海道大学 名誉教授)
委員 林 辰夫(アジア大陸自転車競技連合理事)
委員 宮澤崇史(宮澤崇史 Management Office bravo 代表)
- 4 議事次第
 - (1) 開会
 - (2) 検討会
 - (3) 閉会
- 5 配布資料
説明資料
第4回ツール・ド・北海道安全対策検討会議事要旨

(検討会概要)

- 1 開会
- 2 検討会

最初に、武藤新座長からの挨拶。

続けて、事務局から資料説明。

1点目は、これまでの検討会(4回開催)の議論経過を報告。

2点目は、「チーム・ライダーに関する事前周知」についての説明。

説明後の各委員からの発言については以下のとおり。

- 海外の大会では、大きく拡大した地図に危険個所をピクトグラムで示し、コースの危険箇所には特殊なユニフォームを着たマーシャルが立っている。右左折の表示を路面にも描いて分かりやすくしている。資料に各国のピクトグラムの事例があったが、UCIの例などを参考に、分かりやすいものにした方がよい。
- 海外でのローリングクロージャーはバイクと地域のボランティアで行っている。ツール・ド・北海道はどのくらいの認知度があるのか。地域の方に協力してもらえるようしないとならない。ローリングクロージャーとは、車を止め、車列(レース)の通過後、近道を使ったり、または車列を追い抜いて、その先で同じことをチェーンのように繰り返すこと。
- 監督会議は30分以内というルールがあるが、国際レースなら、日本語を使わず英語だけで行ってもよい。

ただ安全面を強調するならば、説明時間が長くなることも問題ない。

- 「ツール・ド・北海道」が道民や地域住民にお祭り感覚で受け入れられるような空気づくりが必要である。海外のレースは派手な数台のデコレーションカーが先行し、応援グッズを配りながら、まもなく選手が来ることをアナウンスし、大会の盛り上げを図っている。
- 大会の開催や通行止めの周知方法は、多くの人の目に留まるように色々と考えていかなければならぬ。地域の方には回覧板が有効と考える。
- 地域住民の理解は大事である。コース情報が公開されると、選手が練習に来る場合がある。住民とトラブルにならないために、マナーを守った走りが必要。住民への情報提供や、チーム関係者への事前の注意喚起が必要である。
- コーナリングは選手によって得手不得手がある。トップ選手だからコーナリングが上手い、下位の選手だから下手という訳でもない。
危険なポイントを技量のない選手に合わせるよりは、中間ぐらいの選手に合わせる方がよいと思う。
手前でブレーキングが必要な下りのコーナは特にデンジャーポイント。主催者側は事前にコースを走って、危険なポイントを絞っておくべき。
- 監督に（大会のルールや危険箇所など）伝わっているのか。そして、監督が選手に伝えているのかをチェックする仕組みが必要である。
用心深く伝える、伝達する方法をきちんと整備する、伝わっているかどうかをチェックしないと、すぐに穴が空き、その穴によって事故につながると考えられるので、丁寧な仕掛けを構築する。
重要なことは時間をかけ、何度も説明する体制を作るべき。
- ツール・ド・北海道を再開するにあたり、自治体、経済界、観光業界などから開催に向けたムーブメントを作る。開催地域が盛り上がる意識の醸成が必要。

(以上)